

ノンフィクション

天城レナ

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

とある小説家、「天城レナ」の執筆してきた小説達と、その最終作の会見の様子。

目次

ノンフィクション

黒に堕ちる 作者「天城レナ」

天城レナの処女作であり、若者を中心にカルト的な人気を博した鬼作。朝が来なくなり、荒廃した東京を舞台に主人公の少年が強かに生きる様を描いた小説である。

等身大の少年と、個性の強い大人達の人間関係の加減、多少含まれるエログロ描写、予想の出来ない展開等がSNS等で拡散され、鬼才「天城レナ」の登場を堂々と世間に示すこととなった。

また、度重なる重版により、作中にて重要なフアクターとなる「新宿」の書店にて、急遽サイン会が決定される。ペンネーム通り天城レナは女性であり、年齢も二十三歳という若さ、そして何より非常に整った顔立ちをしていた為、ファンは急増。テレビ等でも、「美人過ぎる小説家」と取り上げられることとなった。

真っ赤な嘘 作者「天城レナ」

「黒に堕ちる」にて鮮烈なデビューを飾った天城レナの第二作。前作のファンタジックで仄暗い印象とは打って変わって、恋愛小説となっている。自分の小指に「赤い糸」が見える世界で、嘘を吐き続けて生きてきた詐欺師の少年が赤い糸の先を見つけ、想いを実らせる為に奔走する物語である。

少年が詐欺師となった理由、そして恋の行方が「あまりにも切ない」と女性にヒットし、処女作の売上を超えるヒット作となる。同作について某雑誌にて取材を受けた際、天城レナは「嘘も吐き続ければ真実になる。私は自分の作品がいつかフィクションじゃなくて、現実になってくれたらいいなって思います」とコメントした。

週刊秋藤 九月第二週号 特集ページ

某雑誌にて天城レナが彼女の作品「真っ赤な嘘」の取材を受けた際のコメントが掲載された二日後、彼女の処女作「黒に堕ちる」の作中に登場する殺人事件と酷似した事件が発生。逮捕された犯人の住居

からは天城レナの小説が見つかり、特集ページでは天城レナの作品のエログロ描写の異常性や、その描写が読者に与える影響、若者の影響されやすさ等を過大的に捉えて批判した。

この記事を皮切りに様々なメディアが天城レナに対して様々なレッテルを貼ることとなった。「鬼才天城レナは新たな宗教の教祖!?!」「反社会主義者」「人殺しとレイプに性的興奮を覚える変態!?!」等々。天城レナは自らの処女作を模した殺人事件について「捉え方を間違えましたね」とコメント。このコメントも少々世間の場を荒らすこととなった。

雑食 作者「天城レナ」

天城レナの三作目は短編小説だった。その内容は遭難した親子の物語なのだが、腹を空かせた子どもが幻覚を見て、母親を食べてしまうという凄惨なものであった。彼女の小説を模した殺人事件があった直後にこの作品が発表された為、彼女の異常性を指摘する批評家も少なくなかった。しかしそんな世間の炎を気にすることなく、この短編小説もまた例に漏れず多数のファンを惹き付けることとなった。

某雑誌 天城レナ特集

作品が発表される度に世間を賑わせ騒がせ、太陽のようにその名を轟かせた天城レナ。「真っ赤な嘘」の発表時に彼女の取材文を掲載した某雑誌が、天城レナに再度取材を申し込んだ。今回は「雑食」についてではなく、彼女そのものにスポットライトを当てた特集記事となる。

天城レナは取材の中で敬愛する小説家を聞かれており、彼女はその問いに「高槻泉ですね。漫画の中に出てくる小説家なんですけど」と答えている。「東京喰種っていう漫画に出てくる小説家さんなんですけど、漫画の中に高槻泉が書いた小説の一節なんか出てきたりするんですよね。その一つ一つが、すごく好きで。……これあれですね、東京喰種の作者さんが好きです！っていうのと同じですね（笑）「雑食」も、リスペクトの意味を込めて人を食べる、という描写を取り入

れました」と嬉しそうに語っていたらしい。

馬鹿は夢を見る 作者「天城レナ」

売れない女優が、自分の才能の限界を感じながらもがき続ける様を書いた作品。「黒に墮ちる」の様な人間同士の関係性や、「真つ赤な嘘」のような感情移入のし易さがあり、また凄惨な描写が一切無いことから「天城レナは猟奇的な作品ばかりだ」という評価を押し退けることとなった。

天城レナはあとがきにて「私も売れない作家になつていたらこうなつていたかもしれない、と思うと親近感を覚えずにはいられなかった。書いている最中はずっと彼女は私の中にいました」と書いており、後のインタビュー等でも「あの作品を書いている時は怖かった。自分が侵食されていく気がして」と語っており、彼女にとつても何か重要なフアクターである作品であるのだろう。

翌年、「馬鹿は夢を見る」は映画化が決定し、主人公を演じる女優は一世を風靡する女優では無く、オーディションから選ばれた無名の女優だった。この事も相まって、同作は公開前から多大な期待を寄せられることとなり、公開されてみれば映画は大ヒット。主人公を演じた無名女優はその体当たりな演技が評価され、その名を世間に知らしめることとなった。この映画について天城レナは、「二つ、求めていた形でフィクションが現実になってくれた気がします。とても嬉しい」とコメントした。

融けた街 作者「天城レナ」

主人公以外の全ての人間が、主人公の住む街から消えてしまった、という物語。街は確かにそこに存在するのだが、そこに人がいないだけで街は街の姿を失ってしまったかのように静かで、そして退廃的となる。読んでいるうちに、そう感じてしまう感覚は、あの朝が来ない東京が舞台の「黒に墮ちる」と似たようなものを感じるだろう。

大きな街にたった一人となった主人公は、笑いながらガラスを叩き割って回ったり、車や自転車を破壊したりと破壊の限りを尽くすが、

最期には満足したように自殺する。そして街に住む最後の一人が死んだその時、街は融ける。

後のインタビューにて、天城レナは「一回やってみたいですよ、ガラスとか割って回るの。特に、執筆が止まったり、何かの拍子に「自分は孤独だ」と実感したら色々なものをぶっ壊したくなります。やりませんけどね」とコメントしている。

時が止まった少年 作者「天城レナ」

天城レナ史上、最も世間に波紋を呼んだ作品である。主人公は多数の少年少女を強姦、そして殺害してきた快樂殺人者で、その容姿は成人しているというのにまるで中学生のように幼い。まるで、時が止まったかのように成長が止まった主人公が、その現実には耐えきれず小學生をレイプしては凄惨に殺してしまう様を書いた物語である。

作品の猟奇的な描写や異常性に様々な方面から天城レナは批判され、一部の過激派からは「この小説を発禁にしろ」とまで騒がれた。良くも悪くも天城レナという女性の影響力が高く、多くの人の目に留まる人物であったのだ。「また以前のように小説を模した殺人事件が起きたらどうするつもりだ」という意見も多く、天城レナはそれに対して「大丈夫です。今回は起こりませんから」と公の場で堂々と言い放った。

この発言により、以前の殺人事件は天城レナが起きるように仕組んでいたのではないか、という憶測も飛び交うこととなる。その憶測に対しては「そんな神様みたいなこと出来るわけないじゃないですか。出来たら面白いかもしれませんがね、好きな人に告白されたい！とか夢が広がります」とコメントしている。

魔法が解けるまで 作者「天城レナ」

作品のテーマは「クリスマス」。イルミネーションで彩られ、街全体が魔法にかけられたような十二月を舞台に、人生に疲れた二十五歳のサラリーマンと、虐めが原因で自殺を図ろうとした女子高生の二人が邂逅し、「クリスマスまで恋人になる」という奇妙な約束を交わす物

語。三週間だけ、互いが互いに縋り、互いが互いを励まし合い、そしてクリスマスという魔法が解けた時に互いが互いを忘れる。奇妙な約束の行く末は人々の涙を誘い、彼女の作品の中でも最も発行部数が伸びた作品となった。

また、連続ドラマという形で実写化も決定。決まった際に天城レナはインタビューを受けており、「私、街っていう箱が好きなんだと思います。今回の箱は本当に魔法にかけられちゃいましたね、馬鹿は夢を見るの時も思ってたんですけど、感無量です」とコメントを残している。主演の俳優は特撮ヒーロー番組の主演を演じた新進気鋭の俳優が選ばれ、女優も現役高校生の人気女優が抜擢された。

たった一人の戦争 作者「天城レナ」

街という名の箱が好きだ、とコメントした彼女が次に発表した作品は、街を追い出された少年の物語。とある理由から地下の世界へ追いやられた少年が、たった一人で地上に戦争を仕掛けるストーリーだ。「街が好きだ」と言っていた彼女が、街を敵に回す作品を生み出した、という事実は、彼女が新たな挑戦に足を踏み入れたと言っても過言では無かったのかもしれない。

差別や虐待等を強く否定するストーリーとなっており、猟奇的な描写や官能的な描写も見受けられない為、「最も読み易い天城レナ」と帯に書かれる程には万人受けする作品となった。一部の熱狂的なファンからは「物足りない」という声もあり、天城レナ本人も「私の作品を好き好んで読む人にとっては刺激が足りないかも」とコメントしている。

彼女は「色々なところで散々な言われようしてますけどね、「天城レナはサイコパス」とか「貞操観念と倫理観が無さすぎる」とか（笑）それでもやっぱり差別とか、そういうのは許したくないですよね」と自身のSNSに投稿。「でも一人で戦争は怖いだろうなあ」と続いている。

宣戦布告 作者「ノンフィクション」 発表会見

あの会見を見た者は……否、あの日に生きていた者は、忘れることは無いだろう。あの、天城レナという女性を。

「私は喰種です」

「あの漫画に登場する、人を喰べて生きている、あの喰種です」

「喰種は実在します。私が、私の父親がそうなのですから」

赫眼。

彼女の右眼は、白いはずの場所が黒く、そして黒いはずの場所は赤かった。薄気味悪い、カラーコンタクトを着けているような。はたまた、何かの病気に罹ったかのような。そう、天城レナが敬愛しているという小説家……「東京喰種」という名の漫画に登場する「高槻泉」、或いは「エト」のような眼。

騒然とする会場。マイクを通した彼女の声は、魔女の呪いのように重く、そして透き通って聴こえた。

「少し、お話をさせてください」

——東京喰種という漫画を知っていますか？舞台は架空の東京。その世界には、人と同じ姿かたちをしていながら、人肉を喰らわなくては生きていくことが出来ない種族、喰種が存在しています。

……その世界には、という表現は適切じゃありませんね。この世界、即ち現実にも喰種は存在します。例えば、私「天城玲奈」は、喰種の父親と人間の母親から生まれた、謂わば半喰種です。俄には信じ難いとは思いますが、これは紛れもない事実です。この黒い眼……赫眼がその証拠です。

私は、本を書き始めるまで、ずっと一人ぼっちでした。物心ついた頃には、父さんは死んでいました。父さんは、母さんを愛してしまつたから、人間を愛してしまつたから、人間を食べることが出来なくなっていたそうです。そして、私が産まれてすぐに亡くなったそうです。

母さんは……私が幼い頃に死にました。殺したのは私です。

私は、半喰種です。普通の食事を摂ることも出来ず。然しながら、喰種の血も流れている以上、喰種の細胞も含まれている以上、生きていく限りは人の肉を喰らわなくては生きていけません。幼かった頃の私は、人を殺す術を、人を喰らう術を知りませんでした。喰種の友人も、知り合いもいませんでした。喰種と結婚する為に、家族や友人を捨てた母さんしか、私にはいませんでした。

……「雑食」という短編小説を書きましたが、あれは私の体験談と言っても差し支えありません。母さんは、私が苦しむ姿を見て、自らの食事となることを望みました。私は本能に逆らうことが出来ず、そのまま母さんを食べました。

そこからは、ずっと一人ぼっちでした。半分は人間であっても、半分は人外、喰種です。もし、自分の正体がバレてしまつたら。そう考えると怖くて怖くて、この東京という街の地下深くで毎日泣きながら過ごしました。

けれど、生きる為には食べなくてはいけない。私は野良猫のように魚や肉、野菜を人から盗み、悪魔のように世捨て人を殺して生き続けました。服や靴、生きていく為に必要なものはなんでも盗み、殺して奪い、時にはカラスのように漁りました。

いつしか私は、地上へ出てみたくなりました。皆さんもご存知の通り、私は「街という名の箱」が大好きです。沢山の人が暮らす箱。太陽の光が届かない地下とは違い、昼間は明るく、夜も月明かりのお陰で真っ暗にならない地上が、とても羨ましかったです。

けれど、地上へ出て、人のような生活をしたくても、当時十五歳だった私がそう簡単に人の生活が出来るはずもなく。身体を売って金を稼ぎ、稀に気に入った男がいれば、証拠も残さず肉を喰う生活が続きました。「貞操観念が無い」なんてネット上で批判されていましたが、ある意味間違いありません。援交紛いのことをしていたのですから。

地上へ出て、私のしていることは地下と変わりませんでした。

……そんな地上で見つけた漫画が、東京喰種でした。

父さんが喰種という種族であったことは聞かされていましたが、私自身が半喰種であることも知っていましたから、その名前を見つけた

時には驚きました。喰種という種族は、世間に知られていないと聞かされてしまったから。

見つけたのは泊まり込んでいたネットカフェでしたので、そのまま何もせずに読み通しました。とても面白い物語で、引き込まれたことを覚えています。

その中でも、「高槻泉」という登場人物は、私にとって特別なものでした。

私と同じ、半喰種であり、喰種の父と人間の母を持つキャラクター。私は物語の中の架空の人物と知りながら、彼女に強い憧れを抱きました。彼女は小説家でした。だから、私も小説家になりました。

私は、夢を見てしまったのです。馬鹿で、貞操観念の無い私が、「高槻泉」という人物のようになりたいと、夢を見たのです。

「……私は、この時が止まった世界を壊したい」

世界が間違っている、とは言いません。けれど、そうですね……敢えて言うならば、「世界は人間を愛してる」とでも言いましょうか。私のような、喰種のような、人間を喰らうような、そういった存在は愛されない。

「時が止まった少年」では、自分と同じような身長、同じように見える年齢の子どもをレイプする主人公の物語でした。……私達喰種は、偶然貴方達人間と同じような容姿をしていて、偶然生きる為には貴方達人間を喰らわなくてはいけなかっただけです。なのに、何故世界は人間を愛し、私達は地下で身を潜めなくてはならないのでしょうか。

地上で、喰種は私一人だけです。街に、私しかいないのです。だから、だから私は――

「この作品を世に送り出すと共に、喰種「ノンフィクション」として貴方達人間に「宣戦布告」をします」

街にたった一人になってしまったのだから、ガラスを叩き割って回ります。貴方達人間の頭蓋を叩き割って回ります。街という箱に、喰種は私一人だけなのですから。

言うならば、たった一人の戦争、かもしれない。人間が愛される」というくだらない魔法を解くための戦争です。

……私は、いつか自分の作品がフィクションでは無く、現実になってほしい。そんなことを言った気がします。それを聞いた馬鹿が私の作品を模した殺人事件を起こしたりもしましたね。

「自分で、現実にするので問題ありません。小説家「天城レナ」の原点である「黒に堕ちる」の世界は、私が創ります」

……ああ、そうだ。申し訳ありません。一つだけ。一つだけ、真つ赤な嘘を吐いてしまいました。

私はたった一人の戦争、と言いましたが……あれは嘘です。

——願わくば、私の同胞がこの作品を読むことを。